# E-4　「－テイル」の諸機能の構造と機能間の曖昧性に対する定量的検証
## －第二言語習得研究への応用を目指して－

山田祐也（名古屋大学大学院）・堀江薫（名古屋大学）

**要旨：** 日本語の「－テイル」表現は、「瞬間性」、「限界性」、「動作性」などの動詞が持つアスペクト成分と統語的特徴による制約が複雑に相互作用した上で機能の成立が規定される。しかし、従来の「－テイル」を対象にした習得研究では統語的特徴が分析に反映されておらず、アスペクト成分との相互作用によって「－テイル」の多様な機能がどのような構造をなしているかを十分に捉えることができなかった。さらに、「－テイル」表現には、単一の機能に絞り込むことができない曖昧な用例も観察される。しかし、従来の習得研究が採用してきた検証アプローチでは機能間の曖昧性を分析に反映させることができず、「－テイル」機能が持つ曖昧性の特徴（機能間の近似傾向など）を分析することができなかった。そこで、本研究では定量的分析手法（クラスタ分析）を用いて、「アスペクト成分」と「統語的特徴」の相互作用によって「－テイル」の諸機能がどのような構造をなしているかを検証した。さらに、曖昧性が生じている機能を表す変数をそれぞれコード化することによって、「－テイル」表現の曖昧性を定量的に捉えられるようにした。分析の結果、従来の検証アプローチでは捉えることができなかった、表面的には同一の機能を成立させる「－テイル」表現の諸機能の構造や曖昧性の特徴における相違をクラスタとして捉えることができた。

### 1. 研究の背景と問題の所在

日本語の「－テイル」表現は、「動作・出来事」の継続や動作・出来事によって引き起こされた「結果状態」の継続を表すアスペクト形式の一つとして、幅広い分野において研究が行われてきた。従来の「－テイル」を対象にした習得研究は、(I) 動詞が持つアスペクト成分（Vendler, 1967 など）が「－テイル」の習得にどのような影響を与えるのかを検証するアプローチ（Shirai and Kurono, 1998 など）と、(II)「－テイル」の機能別に習得状況を検証するアプローチ（菅谷, 2004 など）の 2 つに大きく分類することができる。それらのアプローチに基づいて検証を行ってきた研究では、第二言語としての日本語習得において、「活動動詞＋テイル」および「－テイル」の「動作の継続」機能が、他の動詞タイプと「－テイル」の組み合わせ、機能に比べ習得（正答・正用）が容易だという結果が多く報告されている。

一方で、動詞が持つアスペクト成分とは異なる、統語的特徴の観点から「－テイル」機能の成立を考察した研究に奥田（1978）、工藤（1995）、Ogihara(1998)などがある。奥田（1978）、工藤（1995）、Ogihara(1998)は、「－テイル」機能の成立は、動詞の持つアスペクト成分によって規定されるものではなく、「－テイル」と結びつく動詞の表すものが主語の「動作」か「変化」かによって規定されると指摘している。

| | | |
|---|---|---|
| (1) タロウが三十秒でドアを閉めた。 | | |
| (2) 三十秒でドアが閉まった。 | | (Ogihara 1998 : 175) |
| (3) タロウは今ドアを閉めている。 | 「動作の継続」 | |
| (4) ドアは今閉まっている。 | 「結果状態」 | (Ogihara 1998 : 171) |
| (5) ドアが閉められている。 | 「結果状態」 | (筆者作例) |

上の (1)、(2) のように、「閉める」、「閉まる」は「－タ」と結びついた際には同一の時間幅を持った出来事を表す。しかし、「閉める」、「閉まる」は(3)、(4) のように「－テイル」と結びつくことによって、それぞれが異なる機能を成立させるようになる。このことから Ogihara(1998)は動詞が持つアスペクト成分が「－テイル」機能の成立を規定するという議論の

矛盾点を指摘している。その上で、奥田（1978）、工藤（1995）と同様に、主語(タロウ)の「動作」を表す（3）では「動作の継続」機能が成立し、主語（ドア）の「変化」を表す（4）では「結果状態」機能が成立することを指摘している。統語的特徴の観点から「ーテイル」機能の成立を考察する議論は、動詞の持つアスペクト成分を基にした考察では説明が困難な（5）の受身文が「結果状態」機能を成立させる要因も、「「変化」を表す目的語（ドア）が受身によって主語化されるため」という一貫性を持った説明を行うことができる。しかし、白井（2004）は統語的特徴の観点から「ーテイル」機能の成立を考察するアプローチの重要性を指摘した上で、考察からアスペクト成分を完全に排除することに対する問題点を指摘している。

（6） 直美は電気を消している。　　「結果状態」　　（白井 2004 : 90）

上の（6）では、主語（直美）の「動作」が表されているが、「ーテイル」機能は「直美が電気を消したままにしている」という「結果状態」を表している（白井, 2004）。白井（2004）は、（6）は主語（直美）の「動作」と目的語（電気）の「変化」を表すものの、その動作が瞬間的なことから、「動作の継続」機能は成立し得ないが、「ーテイル」機能は、アスペクト成分と統語的特徴、両方の制約を満たす形で規定されると主張している。すなわち、（6）のような文では、アスペクト成分による制約（瞬間性）によって、目的語（電気）の「変化」がフォーカスされ、「結果状態」機能の成立が優先されるが、統語的特徴の制約による、主語（直美）の動作・関与も同時に表していると白井（2004）は指摘している。また、次のような二側面動詞（奥田,1978 ; 工藤,1995）が表す「ーテイル」表現においてもアスペクト成分が機能成立に影響を及ぼしていると考えられる。

（7） コップの水が一瞬で増えている。　　「*動作の継続/結果状態」
（8） プールの水がじょじょに増えている。　　「動作の継続/?結果状態」　　（筆者作例）

上の（7）、（8）では、どちらも主語（コップ/プールの水量）の変化が表されているが、副詞が持つアスペクト成分によって「ーテイル」機能の成立状況が異なっていることがわかる。これらのことからも、日本語の「ーテイル」表現は、動詞が持つアスペクト成分と統語的特徴による制約が複雑に相互作用した上で機能の成立が規定されることがわかる。しかしながら、従来の検証（I）、（II）では、統語的特徴が分析に反映されておらず、アスペクト成分との相互作用によって「ーテイル」の多様な機能がどのような構造をなしているかを十分に捉えることができなかった。

次に、従来の習得研究では、「ーテイル」の基本的機能である「動作の継続」と「結果状態」機能の習得状況が主な検証対象となってきた。しかし、「ーテイル」機能には派生的機能として「完了（パーフェクト）」と「習慣」機能もある（工藤, 1995; 白井, 2004）。さらに、江田（2013）が行った調査では、小説では「運動短期」機能（本研究では「動作の継続」に分類）が多く見られるものの、新書や会話などでは、「運動短期」機能はあまり観察されないことが指摘されている。対照的に「運動長期」機能（本研究では「習慣」に分類）は小説、新書、会話を通して安定的に観察されることが明らかになっている。また、「ーテイル」表現には、単一の機能に絞り込むことができない曖昧な用例も観察される。

（9） 私の父は時計屋を *営む/営んでいる。　　（野田 2011 : 209）

上の（9）は、現在の「習慣」を表す際に「ーテイル」形での使用が義務的であり、具体的動作を表さない点において、「状態」を表す第四種の動詞（金田一, 1950）との共通点を野田（2011）は指摘している。金田一（1950）の第四種の動詞は「ーテイル」形での使用が義務的であり、「単なる状態」機能を表す動詞である。「単なる状態」機能は具体的な状

態変化が必ずしも含意されていないという点で「結果状態」機能と区別されることがあるが、「単なる状態」機能は概念上の状態変化を含意していると白井（2004）、西・白井（2004）などは主張し、二つの機能を本質的に同一の機能として扱う研究もある。本研究も白井（2004）、西・白井（2004）と同様の立場をとり、「単なる状態」を「結果状態」機能に含めて議論を進める。また、「習慣」を表す機能は状態・状況、属性を特徴づける機能と連続性を持つことが指摘されていることからも（Comrie, 1976; Bertinetto and Lenci, 2012 など）、(9) のような用例は、「習慣」と「結果状態」が近似している機能だと考えられる。しかし、従来の検証（I）、（II）では、(9) で見られるような機能間の曖昧性を分析に反映させることができず、「ーテイル」機能が持つ曖昧性の特徴（機能間の近似傾向など）を分析することができなかった。

## 2. 研究課題

以上で言及した従来の検証（I）、（II）に残る課題点を解消するために、本研究では定量的分析手法を用いて以下の研究課題に取り組む。

①「アスペクト成分」と「統語的特徴」による制約の相互作用によって「ーテイル」の諸機能がどのような構造をなしているかを検証する。

②単一の機能に絞り込むことができない「ーテイル」表現の曖昧性を分析に反映させ、曖昧性に見られる特徴を検証する。

①、②で得られた結果を基に、本研究で行う検証手法を習得研究においてどのように活用できるかを検討する。

## 3. 分析

### 3.1 分析データおよび分析方法

本研究では、李・井佐原（2006）で提唱されている文法の生起文脈に存在する複数の制約を変数化し、クラスタ分析を用いて変数（制約）間の関係構造を検証していく定量的分析手法を応用する。分析対象の「ーテイル」表現は、「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」（金澤（編），2014）に収録されている日本語母語話者 30 名による作文データを KH Coder Version 3. Alpha. 16 で形態素解析（MeCab）し、KWIC コンコーダンスを用いて抽出した。

クラスタ分析を用いて、「ーテイル」の諸機能がどのような構造をなしているかを検証するために、「アスペクト成分」、「統語的特徴」、「ーテイル機能」をそれぞれ変数として設定した。先ず、アスペクト成分の変数化において、従来の研究でも扱われてきた「瞬間性（Punctual）」、「限界性（Telic）」、「動作性（Dynamic）」の他に、「習慣」機能を成立させるための「反復性」も設定した。ここでの「反復性」は Bertinetto and Lenci（2012）と同様の立場をとり、「ドアをノックする」のような、いわゆる瞬間活動動詞による反復（Event-internal pluractionality）は「習慣」機能を成立させる反復（Event-external pluractionality）とは区別し、後者を本研究での「反復性」として扱う。次に、統語的特徴の変数化には、主語の観点における「動作/変化」と目的語の観点における「変化/非変化」を表す変数を設定した。また、目的語の主語化を行う「受身」も統語的特徴を表す変数として設定した。最後に、「ーテイル」機能の変数には「動作の継続」、「結果状態」、「パーフェクト」、「習慣」を設定した。下の（10）-（13）にそれぞれの機能の例（白井，2004）を提示する。

| | | |
|---|---|---|
| （10） 健が走っている。 | 「進行」（本研究では「動作の継続」） | |
| （11） 窓が開いている。 | 「結果状態」 | |
| （12） 健は本を三冊書いている。 | 「完了」（本研究では「パーフェクト」） | |
| （13） 健は最近車で学校に行っている。 | 「習慣」 | 白井（2004：77） |

以上の「アスペクト成分（4 変数）」、「統語的特徴（5 変数）」、「ーテイル機能（4 変数）」、合計 13 変数を用いて、上

で抽出した 791 例（異なり語数 264 語）の「ーテイル」表現を[1/0]でコード化した（本研究では「ーテイル」の否定形は分析から除外した）。

アスペクト成分と統語的特徴のコード化は第一筆者が行った。アスペクト成分のコード化は、Shirai and Kurono（1998）のテストを参考にしながら、「ーテイル」表現が使われている文脈に合わせて行った。

統語的特徴のコード化では、先ず「ーテイル」を伴う動詞が目的語を取る他動詞なのか、目的語を取らない自動詞なのかを『新明解国語辞典第七版（web 版）』（三省堂, 2011）と『明鏡国語辞典第二版』（大修館書店, 2010）を参照して分類した。その後、工藤（1995）の動詞分類を参考にしながら、「ーテイル」表現が使われている文脈に合わせて、主語の「動作/変化」と目的語の「変化/非変化」を判断してコード化した。例えば、「ーテイル」を伴う動詞が他動詞の場合は、主語の「動作/変化」と目的語の「変化/非変化」をそれぞれ判断して[1/0]でコード化を行った。一方、自動詞の場合は目的語を取らないことから、主語における「動作/変化」のみが[1/0]でのコード化の対象となり、目的語における「変化/非変化」はどちらも[0]でコード化した。また、今回分析対象にしたデータ内には、再帰動詞や受身文による「ーテイル」表現も含まれていた。再帰動詞の場合は、「主語動作」、「主語変化」と「目的語変化」を表すことから、それらの変数をそれぞれ[1]とコード化した。受身文の場合は、能動態時における主語の「動作/変化」と目的語の「変化/非変化」を[1/0]でコード化した後、目的語の主語化を表すために、「受身」を[1]でコード化した。なお、連体修飾節の「ーテイル」表現においては、述定関係に戻した際の主語の「動作/変化」と目的語の「変化/非変化」を判断してコード化した。

「ーテイル」機能のコード化は、アスペクト成分と統語的特徴に比べ客観的基準が少ないことから、筆者の他に日本語母語話者 1 名にも協力を依頼し、日本語母語話者 2 名で上の（10）−(13)のような機能の例、副詞との共起可能性、文脈を確認しながらコード化を行った。コード化の際、単一の「ーテイル」機能に絞り込むことができない用例に対しては、曖昧性が生じている機能を表す変数をそれぞれコード化することによって、曖昧性を定量的に捉えられるようにした。以下の表 1 に実際に行ったコード化の例を提示する。

表 1. コード化の実例

| 例 ： 結局、試験は不合格だったけど、今は地元の市役所で臨時で働いてるよ。 | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アスペクト成分 | | | | 統語的特徴 | | | | | 「ーテイル」機能 | | | |
| | | | | 主語 | | 目的語 | | | | | | |
| 瞬間性 | 限界性 | 動作性 | 反復性 | 動作 | 変化 | 変化 | 非変化 | 受身 | 動作の継続 | 結果状態 | 習慣 | パーフェクト |
| 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 |

表 1 の「今は地元の市役所で臨時で働いてるよ。」はアスペクト成分において、「動作性」と「反復性」を[1]とコード化した。統語的特徴においては、「働く」という動詞は、目的語を取らない自動詞であることから、「主語の動作」のみを[1]とコード化した。さらに、表 1 の用例は「ーテイル」機能において、現在の「習慣」を表す機能だけではなく、「試験が不合格だったから、今は臨時で働いている状態・状況だ」という「結果状態」機能との曖昧性も読み取れることから、「習慣」と「結果状態」機能にそれぞれ[1]とコード化した。

### 3.2 結果と考察

節 3.1 の手順でコード化を行ったデータセットを、IBM SPSS Version 22 を用いて分析した。本研究で分析対象とした「ーテイル」構文は 791 例とデータ数が大きいことからも、李・井佐原（2006）と同様、階層的クラスタ法と非階層的クラスタ法を併用して行った。先ず、階層的クラスタ法（Ward 法[平方ユークリッド距離]）を用いてデンドログラムを作成し、クラスタ形成の傾向を視覚的に把握した。その結果、傾向として 4 つのクラスタと 6 つのクラスタでクラスタ形成の

分岐傾向が見られたことから、非階層的クラスタ法（K-means 法）では、クラスタ数を 4 クラスタ、5 クラスタ、6 クラスタとそれぞれ設定して分析した。さらに、クラスタ分割の最適度を評価するために、分類された所属クラスタを従属変数にし、元のクラスタ分析で使用した「アスペクト成分」、「統語的特徴」、「「ーテイル」機能」の変数を独立変数として判別分析を行った。その結果、判別的中率（交差妥当化の結果）が 4 クラスタでは 97.0%、5 クラスタでは 96.1%、6 クラスタでは 94.9%であった。また、実際に分類されている用例の特徴においても 4 クラスタにおいて最も適格に用例の分類が行われていると考えられたことから、本研究では 4 クラスタに基づく考察を進める。

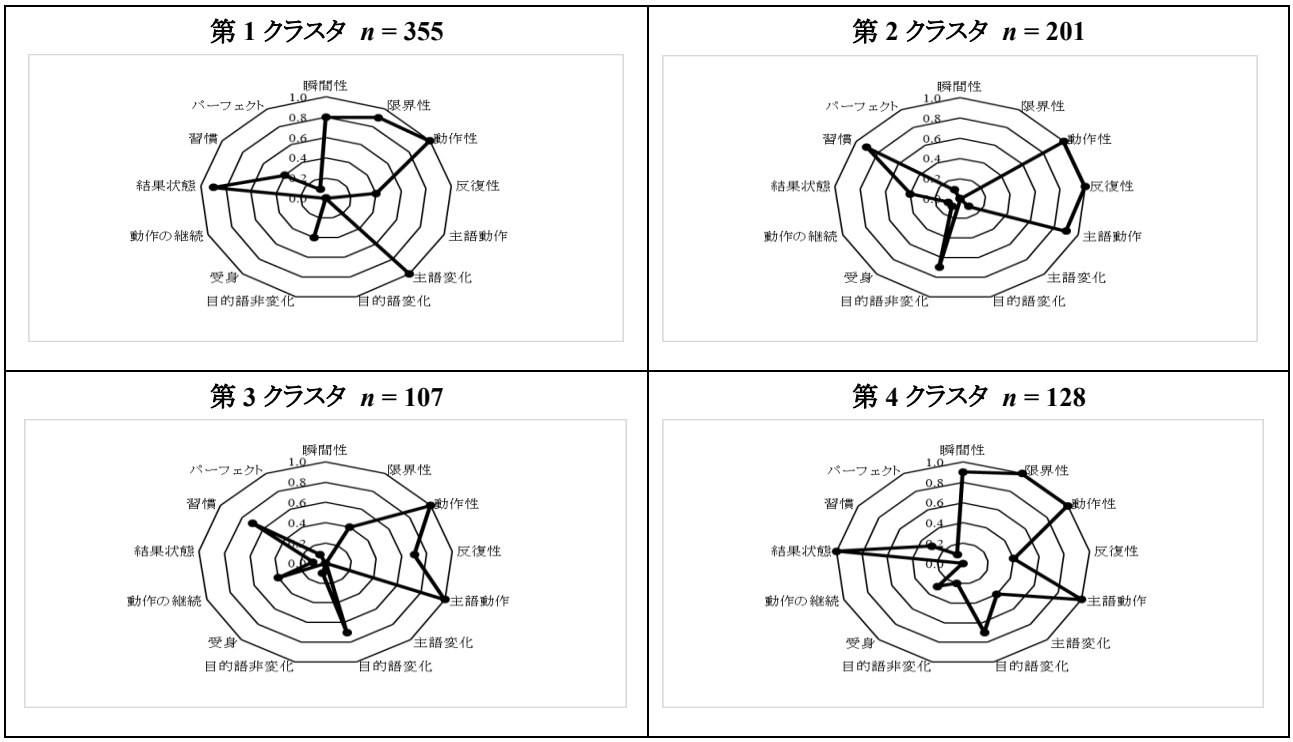


図 1　各クラスタの最終クラスタ中心値

図 1 は各クラスタにおける最終クラスタ中心値をグラフ化したものであり、各クラスタの特徴を表している。先ず第 1 クラスタを見ると、「ーテイル」機能では、「結果状態」機能が主にクラスタの特徴を表しており、部分的に「習慣」機能もクラスタ形成に貢献していることがわかる。アスペクト成分においては、「瞬間性・限界性・動作性」が特徴として表れており、統語的特徴は「主語変化」がクラスタ形成に強く貢献していることがわかる。一方、第 4 クラスタも第 1 クラスタと同様、主に「結果状態」機能がクラスタの特徴を表しており、個々のアスペクト成分の特徴も第 1 クラスタと類似している。しかし、統語的特徴においては、「主語動作・目的語変化」がクラスタ形成に強く貢献していることが読み取れ、「受身」と「主語変化」も部分的にクラスタ形成に貢献していることがわかる。下の(14)、(15)に第 1 クラスタと第 4 クラスタを形成しているそれぞれの用例の一部を提示する（下線は筆者によるもの）。[　]内の数値からは用例の典型性と用例間の近似性を確認できる。

（14）第 1 クラスタ：a.「おすし」は、お米の上に生の魚のさしみがのっています。　［0.76554］
b. みなさん、「七夕」は知っていますよね。　［0.8738］
c. 私もこの町に残り、一生を終えたいと思っています。　［1.07343］
d. 今日、大人でも正しい日本語を話せない人が増えています。　［1.22997］

（15）第 4 クラスタ： a. 鈴木さんって『環境学入門』って本持ってるよね。 ［0.92495］
b. 現在、講義の課題として、先生の研究していらっしゃる分野についてのレポートが課されています。 ［0.99022］
c. 彼の自宅をそのまま用いており、原稿や遺品なども公開されています。 ［1.27937］
d. とりあえず、連絡待ってます。 ［1.52967］

先ず、第 1 クラスタには（14）a のような「瞬間性・限界性・動作性」、「主語変化」、「結果状態」機能という関係性を持った用例が含まれていることがわかる。また、（14）b-c のように心理動詞が主語の心理的変化を表し「結果状態」機能を成立させる用例も第 1 クラスタに含まれており、（14）c では文脈的に「習慣」機能も読み取ることができる。さらに、（14）d のような二側面動詞による主語の変化（「結果状態」）とその変化の継続（「習慣」）を表す用例も第 1 クラスタには見られる。一方、第 4 クラスタには、（15）a のような「主語動作」、「主語変化」、「目的語変化」を表す再帰動詞によって「結果状態」機能が成立している用例が含まれている。さらに、（15）b-c は変化を表す目的語が「受身」によって主語化され「結果状態」機能が成立している用例であるが、（15）c では文脈的に「習慣」機能も読み取ることができる。また、［ ］内の数値からも周辺的な用例ではあるが、（15）d のように「待つ」という統語的には「主体動作」を表すものの、その動作が開始することによって「結果状態」機能を成立させるような用例も第 4 クラスタに含まれている。これらのことから、第 1 クラスタと第 4 クラスタは共通して主に「結果状態」機能を成立させる用例によってクラスタが形成されているが、「統語的特徴」の制約において異なる特徴があることがわかる。

次に第 2 クラスタを見ると、「ーテイル」機能では、「習慣」機能が主にクラスタの特徴を表しており、部分的に「結果状態」機能もクラスタ形成に貢献していることがわかる。アスペクト成分においては、「動作性・反復性」が特徴として表れており、統語的特徴は「主語動作・目的語非変化」がクラスタ形成に強く貢献していることがわかる。一方、第 3 クラスタも第 2 クラスタと同様、主に「習慣」機能がクラスタの特徴を表している。しかし、第 3 クラスタでは「動作の継続」機能が部分的にクラスタ形成に貢献しており、アスペクト成分においては、第 2 クラスタには見られない「限界性」による特徴も読み取ることができる。また、統語的特徴においては、「主語動作・目的語変化」がクラスタ形成に強く貢献していることがわかる。下の(16)、（17）に第 2 クラスタと第 3 クラスタを形成しているそれぞれの用例の一部を提示する。

（16）第 2 クラスタ： a. 一日も早く退院できることを祈ってるよ。 ［0.55289］
b. こんにちは、私は大学の学生自治会の代表をしている【J024】と言うものです。 ［0.70691］
c. 私たちの町の市民総合病院が、経営難のため閉鎖が検討されています。 ［1.14484］
（17）第 3 クラスタ： a. 織姫の仕事ははたを織ることで毎日毎日美しいはたを織っていました。 ［0.89158］
b. あのさ今レポート書いてて、『環境学入門』っていう本が必要なんだけど持ってるかな？ ［1.00492］
c. 天の神さまがしばらく歩いていると草原に出ました。 ［1.44706］

（16）a-c から、第 2 クラスタには形式的には他動詞であるものの、その目的語が具体的な変化を伴わず、アスペクト成分においても限界性を読み取ることができない用例が分類されていることがわかる。さらに、（16）b-c は現在の「習慣」を表す際に「ーテイル」形での使用が義務的であり、具体的動作を表さない点において、第 1 章で言及した例（9）のように「習慣」と「結果状態」機能が近似している用例だと考えられる。すなわち、第 2 クラスタは、「結果状態」機能と近似した「習慣」機能を表す用例によってクラスタが形成されていると考えられる。一方、第 3 クラスタには（17）a-b のように他動詞の形式で、その目的語が具体的な変化を伴う用例が分類されており、アスペクト成分においても限界性を読み取ることができる。また、（17）b は、文脈的に「習慣」と「動作の継続」のどちらの機能も読み取れ、（17）c は「動作の継続」機能を表す用例である。すなわち、第 3 クラスタは、第 2 クラスタに比べ動作がより具体的であり、「動作の継

続」機能と近似した「習慣」機能を表す用例によってクラスタが形成されていると考えることができる。これらのことから、第 2 クラスタと第 3 クラスタは共通して主に「習慣」機能を成立させる用例によってクラスタが形成されているが、アスペクト成分の「限界性/非限界性」、目的語の「変化/非変化」に関連する「動作の具体性」、「「習慣」機能と曖昧性が生じている機能」において異なる特徴があることがわかる。

## 4. まとめと今後の課題

本研究では、従来の検証(I)、(II)では捉えることができなかった、表面的には同一の機能を成立させる「ーテイル」表現の諸機能の構造や曖昧性の特徴(機能間の近似傾向)における相違をクラスタとして捉えることができた。今後は、日本語学習者の「ーテイル」表現も加えて分析を行い、形成されたクラスタ内の日本語母語話者と日本語学習者の分布を検証することにより、日本語母語話者と日本語学習者が産出する「ーテイル」の諸機能の構造や曖昧性の特徴を比較、考察できると考える。

## 参考文献


Bertinetto, P. M., & Lenci, A. (2012) Habituality, Pluractionality, and Imperfectivity. In R. I. Binnick (eds.), *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*. New York: Oxford University Press. pp. 852-880.

Comrie, B. (1976) *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. New York: Cambridge University Press.

金澤裕之(編)(2014)『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房

金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15 号(金田一春彦(編)1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, pp.5-26 に再録)

北原保雄(編)(2010)『明鏡国語辞典 第二版(電子辞書版)』大修館書店

江田すみれ(2013)『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト(日本女子大学叢書 14)』くろしお出版

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現』ひつじ書房

李在鎬・井佐原均(2006)「第二言語獲得における助詞「に」の習得過程の定量的分析」『計量国語学』25 巻 4 号, 163-180.

西由美子・白井恭弘(2004)「会話における「ている」の意味:アスペクト二構成要素理論による分析」南雅彦・浅野真紀子(編)『言語学と日本語教育 3』くろしお出版, pp.231-249.

野田高広(2011)「現代日本語の習慣相と一時性」『東京大学言語学論集』31 号, 197-212.

Ogihara, T. (1998) Tense, aspect, and argument structure. *Semantics and Linguistic Theory*, 8, 169-184.

奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって(下)」『教育国語』54 号, 14-27.

Shirai, Y., & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48-2, 245-279.

白井恭弘(2004)「非完結相「ている」の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉(編)『対照言語学の新展開』ひつじ書房, pp.71-99.

菅谷奈津恵(2004)「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究-L1 の役割の検討」『日本語教育』123 号, 56-65.

Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之(編)(2011)『新明解国語辞典 第七版(web 版)』三省堂